



於
186
2

雙蝶記 一名 霧籬物語 卷之二

江戸 山東庵 京傳 編



○
夫のねき 駕籠の塵兵衛へ旅さへひとま。駕籠とくげて通じ急ぎ。黄昏の頃藤沢の宿み到まし。まことに駕籠とくげて賃錢と拂ひつそぐりけふ足ともやうて遅去ぬ。塵兵衛へ幣又は賃錢の半とまち与へ。かゝ駕籠とくぎ。まちとがく四方山の物語もつて小動みぬ。うちだ幣又は塵兵衛が住家の門をうそ別とづげくつらう。塵兵衛は我宿の片折戸とあり。裏ふ入を娘小蝶走り出。よへいつまう沙坂のおそかり。

さうであつ草卧くさぶとまひつん。足あそびとまわまわとひのて、盤ばんよ水みずを
汲く入いれて持出もつしゆ。手てづゝ父ちちの草鞋くさび脛巾きのこの紐ひもをとひく。足あそをひき
それゑゑぐくゑくゑふ。おのづか常つねの孝心こうしんああくくる。塵じん兵べい清せいの脣くち上の
埃ほりと打うちひて。簞子たんしのえふああら。圍炉裏いのろのをふ寄より芦火燒あしめ。
足あそ生はく。胸むねうちひろげひろげてあくあくり居ゐる娘むすめ。娘むすめにまう茶ちゃと汲くて父ちちをる。
夜よ食くもとくとくりして待まひ。たゞたゞひなんやうど。詞ことささう
りそなな。塵じん兵べい清せいの家内けいないとよすまま。於破矢おへやへひづくひづくへ行ゆくと
うがうがまま。娘むすめ。母おやぢの前程まきと鶴つるヶが園えんの夜よ神樂かみぐらよやよられく
ゆれゆれり。酒さけも買くて戸棚とだなより。老爺おじいの飯めしととあけ
ませと。ひもれて出でゆたかひつつく。塵じん兵べい清せいこれとま。鶴つるヶが園えんの夜よ
神樂かみぐら。つも終夜まつやされ。明日の朝あさまで飯めしるまま。これと夫婦ふうふ

ともをだふだても。前の世よ持來もたらる貧乏ひんぱうせんせんひやひやど云いつ。
の喰酒くきしゅ飲くて身みうちああまうてかのううの眞まの痕はぬぬる。覺おぼえ
稀まれひで臂枕ひじまく。横よみき。もやく鼾あくの声こゑ。娘むすめの父おやぢの裾すそ
ふ物ものかけんと。庭まちみを多おきだだる駕籠こしの蒲團ふとんととらら。ふ。其下その下又
柳條絹やなぎじょうきぬの財布さいふあり。父ちちとゆり起おき。駕籠こし蒲團ふとんの
下したふかかなりのありあり。灯火ひののりみて裏うらとわとわとあり。小判金こばん
七十両よそじょうあり。大おかかから。これこれはままくかのままく。我駕籠わの
内うち忘わとときき。疑ひひなし。今夜こんや藤沢とうざわの宿しゆく。りりううに
近ちかくて平塚ひらつか遠とほくて大磯おおいその宿しゆく。ちやくちやくこれこれと持もつ
旅宿りゆしゆととうのくくをややととひく。つとどとくく身みをを。財布さいふと

懐かしく走りつゞ。波間に氷と出る月景也。雲より雪ふらり
暗られ立りて明松となり。娘さみーくと留主せまと
のまゝ又走りいでゞ。里遠きぬ鐘の声の。月小和一で開
やく然かざれをもや子の刻れを立とすうて思案一けむ。
かのさく人の旅宿といづともふかくも。かく夜ふけくも
おぬるふも便りし。かのさくひり大金を忘れてすゞ。も
先へゆた。わとびらてよがめハ必定。駕籠の塵兵満
とひく此方をか。誰もぬ者もあれを。りくろりよびぬれ
とも知りやとく。今夜へ且とさりて明日未明みつぐゆき。
彼方をとどりとづきてくまをやと心と決て。又立り。娘みち
やうくとよすと語りませ。くま内へ兔角心をぬざれども。

今夜へせんとぐり。身のこゝかの財布と仏壇の下う。戸棚のすらふ
もまひあれ。娘は酒飯の器かどこうとまうりそ。えぐく門を鎖。一
着がえざれかれを着の便ふく。親へ古夜着子へ薄き浦園と
おしか。寒夜ともゆく涼寂鳥筵屏風よもんに間り。濱風とみを
きつ。ちぢく睡みづき。小夜モヤリ更こ。巖嚴ふわる
波の音虺ヒとあした。松ふくす。浦風艘ヒとからみやだ。うちうち
びのす苦家あれ。地震のふよやくふやくと動いていとまう
れど。住され。身のこゝとなく。耳。まくともあを。殊ふ塵兵満
へ昼のつれあれ。身のこゝと。常ふ目さと。娘も一つの禍つぐくべき
く。やうり。とりふ熟睡。一とく。ひれ折。も芦垣と
破り壁と。じりと盗人を。入へ。これへ昼の。と稻村が崎。と

居する野がせりの乞食も。前程ふと此とまろび通ひかく。様子
とくと見しけおもてれを。拔足して親子が寐たゞ人をまへて
越く。仏壇の下戸棚とさう。かの財布とうぶらむく懐ふ。立歩ぐ
や。燈臺と枕上みあたゞよく寐入る。小蝶が寐顔のうらじ
さふやく目ととどけて立ちり。あそく見とれく居たり。この娘
貧家ふ養もく。燕脂白粉のりちうと假されど。おのづくか
養簾えまいそれぞ。玉りてつくれるやうゆく。寐舌髪の額をへふ
こわきとからむてうきぬ。う花のなぐりてくふ。青柳の糸と乱
熱とめふやとめりきをうりなり。此盜人のきみいられを。月代乃毛
長くかかのびて。回とてむ手拭の破と目く。わからの薄のゆうに
つかき出づ。眼光を盛ぢて。船橋高く於て海松のやうに

破きとれた衣の襤縷と著く。うすく破きとる帆席とまく。繩を
帶かへく。身上とく垢つまへときりあり。娘の寐顔とく
のぞき。光るまかぢとひる。うしく見る。燕の巣を角鷹乃
うかふ不異うじ。此盜人心のうちふ。うとも世ふへかむらくへん
娘もあらうよとぞ。現心もく。後ふへぢうぐと顔をくまく
かく見とれども。此とた塵共清りのふもぞれやーん寐うり
れを。盜人のこれふ心つきて足をや。逃出七里が濱乃方へ行ぬ
時ふ此あらうちうた藻屑村の漁師。夜釣のうふ巻の濱ふ漁舟
とのうつけく陸ふ上ア。立ちまく。雲も夜風ふ吹く。影をま
まく住月の光。ふつとく見だす。かの盜人波打ぎへの巖ふ
尻うけと。懷より財布と出。金とぞく居たれど。わやま

奴と少ひてはと寄る。盜人へ手をやく金ととりむきて。優々と歩行。獵師も其ゆくうな立きだり。後ふも立そおのく櫂とあらう。盜人の眉間とつづく打ひ落と。盜人へ懷手をかざしとひかれてこれとまく。一人の獵師へ盜人の向脇とさだすえんと払い打みうつと。まくかわげとどうとえん。高沙と遊散して。あぐくわしきるが。獵師どもハ急不まくまく。左右ひく打せりと。そく身とあらて背後立を二人の獵師へ入來にゆり。よのふ頭と打合く眼く。櫂と撲地と取落く。倭傍所とぬそ人ハ二人の獵師の首頸と両の手ふく。投んとく後ろ。又一人組つま。これふも屬せを盜人へ二人と左右へ投のりく腰とひねり。足と抱く。一人ともう一と蹴りられ。三人ともう

四五間程く海中へまづまぬみわちこらの。鳴の林ぐれどりく。もうと立する水烟。おと白波と盜人へ。行方もあれどあらふ。さて時刻やうりく。冬の夜の長きもとをふわりとく。鳥乃こゑ聞えれど。塵無湯私ノア醒。一と見ゆ。壁く。其あひより江の嶋のわうりまを。寐まく。一目ノ。見ゆ。足のあともわれば。こくいふとおどりとく。起上り。とくにれば。足のあともわれば。こく盜人の入らうんと。いそだまひて戸棚のうちく。財布かく。まともくおどり。ねへ何者かの財布の金の事と知く。盗まつてまふきがな。何ふもあれ。盗まれてひきけり。今ふもかの侍。さく称て取ふ来る。ぬをましよりとつとも豈實とおりづくる。我く貪ふされど。よどむ必定なり。天道へ人と殺りゆ。

こへつふせんくとひて。虹のやうき息と吐手と拱頭とよしと
居とりし。娘も目と醒りとせまとまともみおどろき。父の愁哀
さゑと見り胸これまで泣居る。塵兵湯づくらの多。彼金のみ
と別ふ知者のありべきれう。さむへ一々相棒ふとめ一幣又也。
彼奴昨日將暴みきどく。さぐりあゆみ詞のそし。唯者と
名を。彼とひは是とひ。さすり一き事おへ。まう彼奴と捕え
糺明とべーとひとひさざりて走いだんとある。折しも昨日のきゆく
藻屑村の百姓とおふ案内させくふ来る。塵兵湯へ走出れ
門首少く丁と面と合せらる。さすりへ塵兵湯と肉へつま入りて
がへーく息とつまくひのう。汝が栖とくらうとくさづる来つ。我
昨日汝が駕籠の敷蒲團の下ふ柳條絹の財布小金七十両

入とれと忘れしかたす。さうと汝取あきつんとくとく
ゑすとく。塵兵湯へ今う狼狽何と答へ詞もくちに答へ
あゆみのう。わうの伴ふりふあうとまくとまくと其金の財布
やべ宿ふくして後ふ見つけ。早速拂返しよしと存ぜりと。
汝旅宿も存せを。殊め何れと夜更に故せんをき。今朝
うつぶ汝わとゑとひ返しよしと。大切ふたまへひくわ
拂覽せよ。昨夜あのとく壁と穿ち。足あしづつけなと。盜人ふげんし
まへ。汝が壁と穿ち。足あしづつけなと。盜人ふげんし
など詐へ身を計策を。小児と欺くわざひくれべくや
我昨日道といそぐみ心せられて。金と忘れすか心つと大殘乃

宿までやむ。やうくろひ出一ゆく飯らんとぞ。一昨日の大雨の落水にて折わしく馬入川とゆうと渡るとあよび心かゝる夜とわせり。昨夜丑とぞ比水落へとす。夜中ふり立此藤沢の宿まで汝が名と住所とまて爰ふ来たり。さある悪計とあまだすて汝が身のわざとぞ。どく金と出せと。汝が身湯へ頭と低かく貪き拙者されしも。汝を奪はれしハソリヨリキモドイ。たゞ誓も仕らん。の盗人少心苟も。汝を食儀の間をすく日とぞ。月と打伏てゆがひ。すくの眼とぞ。刀の瑞とぞ。ぬりとつゆきん。詞とぞ。汝をていも。盗人猛ぐ。汝が身とゆきん。汝とぞ。汝が身とけあがりとる。不敵奴我と誰も。汝は強食繕喜里の梅ヶ谷

郡領の家臣。袴田紺九郎とゆう者あり。彼金ハ都のびと主人の用金くれた。序時セ猶豫あへど。汝さをり。肝ふくそ。一通みて金と出をま。梅ヶ谷ふ率て去。图圖とつをだ。糺明せん。百姓とも彼奴とくまと下知せられ。百姓どもへありあふ縄をと。塵埃と押伏て。両手と背へ袖びくせば。娘へきく走り。のうやうてとまわれた。さうひに情をも。妨せば汝もくまで率てゆく。退き居よと呵。刀の瑞とぞつをせれを。背後より一方灯と。汝は撲地うそく倒れ。百姓どもへあれ。塵埃と。汝の妻の於破矢。いそぞく走り。百姓どもとあへど。まゆひの前ふとつきて。恭くりひき。妻ハ此塵埃妻と。汝。



前程よりかくあく 横子とのくじにうけこまくらひが。夫にあたてさある
悪意へなぐれぬほど。ほとびり無理あらず。やそまかくもまくし
けふへありざれば。別ふ金とそのへてせんべりやをぐ。何とぞ午
どる比までゆきまちくまれ。ひとふ願ひよそまつらむく。さくらひ
少く一画とやくしげ。金きくまきを片時の猶豫ひづくれん。さきまく
藻屑村と相待ハツ時ふへ金うけとりふ来るや。其詞と違ふか。
いよく金と返さむ。妻子までもとくへや。困圖よつがだく紅明
ちるぞ後悔をかと詞をぐく言ひ。百姓よもう案内さむく。
藻屑村とまく出去ぬ。塵兵拂ふる息と吻とつきつ。いき
名のくしてまくはれん。幣又う。とのひつ又走せんとすると。
お破矢ひちがーとひくとも。幣又とまくがくよへうへきをとく。

幣入へやひ霄の下どり鶴が岡みやくしれ来玉。妾ふもあひて
昨日序棒とまでごくれ更なども物語終夜庭火と焼彼所と
妾ひとりふ夜と明し。今朝ぬるへ妾が目前見るくろなる。
いきなり幣又が二人ありてこそへ盜もく來べとくわくわんやと
いへる。塵兵拂へれと聞ふとあるうちが彼が仕業みやくと
別人う。さあてへ盗人と食義をとく心當りもす。汝今まくふ
ひりとん。昼夜時まと約せ。いきて金とそのする心をやとくぶくを。
おもやへにと立ちわが。軒ノ下も鳴子とくうて。岡畠裏の
柴の焼そくは筆とす。鳴子のくふ物とく。手をく娘の襟
ふく。これも覽せよとく。塵兵拂へ眉と顬此鳴子のくふ
此娘賣物と書ふ。小蝶が身と賣て金きくまくらひ。

其志へ三分れど此小蝶へとちりと連子ふく。我血ととけざれ娘やえ身と賣せんへ義理とくど別ふ思案と仕えよと。打ましれがもそやいもく。鳴子とをかのう羽風とまよひ。心とまよぐ雀えん養うけ一恩へもる生とつとも相應え。金み鳴子の此小蝶七つの時と養育え。大恩うけ一やきの親の難義と放了身と賣と。をういとみとる僕。夫のとらふのが身と賣妻もあり。我身年今とくとくわくをかじく娘と賣車とを娘ちりもとぞく得心かく。とくを娘へとくがれどゆまよもでりふくふでうかる我身と金ふす。父の難義とふ教ふくと。いづへきりとゆうとく。君傾城へおろすかと。とく人自身供とくるとく。居ごろもいよべと心より。うき。洁業よへとく見

父と母とさと不自由とおがむれん。夫のミ心とくからざりとく。さくと計目衣顔とおりて振袖のうちとくとくとく絶わけ。てふ涙をまく。塵兵湯へ目とまくとく。がる福の出来べき時節ふと有べとがおりとく。身の不運垣とまぐれ多のまうもあうそうなる。此家ふ大切の金とあぐらかだ。熟睡せよ。我一生の誤うさとく。深き孝心のうど限きうとくれどふ難義みせまれをとく。親のまくとく子と賣る。人喰鬼とえせる業。それどうへやうてれよとうけとど。義理をまく。山坂と。重荷とろく息杖の休むひまかたおりひうり。あらやへちく身とよどく。ちうのこまくとくと前程きく。ひ乃詞みくとく金とくまと。佛身とくと行く图圓ふつうと。責問

べーとひりにあらまや。妻承の月とくいをうそれと恐れん。
此ゆく我く親子が心うまくられりと。詞へはつよしれど圓ゆく
済の村あぐれ。今も降べく足えむが。やうく心ととりなれり。さく
ざん日の短きうるるふ。何れと隙とくを。時刻うつて彼より
つくる詞ふちか。夏のすがれとありぬべー。昨日人の語るて聞を
手越の里の妓家が江之鳴り。逗留とく居るとまれを幸う。
妾へ一走り。彼所へゆて。妓家と連来るべー。一世のうれとく小も
あらじのうども。遠くぬ手越えを。伊豫簾の間りとく。
風のうづきもあらぬべー。水の泡の消くりても。瀬のなどく
かるべき。娘發とくあげ化粧とくまりてまと。つらうとく涙と
おまく小裙りたわげと出せんぬ。塵兵湯ハ胸ふきぐとあるゆく

あらきど。闇の奥へ泣くゆく。娘ハ鏡基取り。もと鏡も泣
顔みくりぢぢなる。冬の日常ハ化粧もまれされを。ちりむむ画を
打ちもく。眉く黛モ遠山。雪の白粉脣と色どる燕脂も薄紅葉
髪のやつまゆ。あくと。あら済と水櫛。もくわげぬる乱き箱
しのせくへくる波枕。月と深草のつまゆと。物と。けりと
白歯のよれまくぬ。恍惚子娘の心か。鬼住園ふ行焉。とくがく
とも賣物よ花笄もくと。安つれじ常よりと。櫛まく
もくううき。十四のうち花と垣。と咲せく路の邊乃柳と
とりふ手折せん。と憐むべき。夏うり。とく時刻もくし
母の於破矢へそぐり。妓家と連取り。娘と見せく承ひ。とく
七十両。とさざら。塵兵湯も。涙おきて出来り。とく妓家へ

七十両の金と塵兵湯が前ノモ先。矢立と蛇一ノ筆をやる。
證文と書おり。是ノ手形と押タリ。手形と押タリ。限あけ
とど今更せんもぐもかれた。易シ手形と押タリ。手形とぞ押タリ。
あらやハ妓家アリ。うそりきの親子の連れなまを。ソヘ
からだ支モア。證文と渡セテ。連行支ハモドリ。猶豫を
あくとびゆとく。妓家ハ打カズ。それもウリとも。モレバ暮六ツ
とウルモナゼ飯リタ。モテ於破矢夫アリ。ソリヒテ
する間ニモヤ半モミナベ。彼モテハの来ガムラ。母ノ其
金とモダマテ。少一モモヤ。返スルモカリセトウハモ。塵兵湯を
こもろこうとひのく。七十両の金とモダマツ。門首まで立出一

被りかゝリと落す將棋の駒とひくい取ふ。これ昨日稻村ヶ
崎ゆく我手み取一あくモ金銀二ウの駒。これと忘て今まで
袂み入おき一モ。金の難義か一ツも。前表モテアリ。モアリ
これもひまハ一と。ソロア地上み投モ。歎息一とぞ出ゆ。かる
折一モ七里。濱の方。礼服兩刀。ミシク一出。うち。あれ若侍
挾箱持草履取と具一來。駕籠の塵兵湯もよハこれある。
とくへて案内と乞。於破矢立出。いふもそれハ此方こそを庵。ぐ。
わトハ今宿の居合。モ。何の御用。ソレとのべれ。彼モテハ
遠慮もなげ。打通り。わト他行とわバ。ちづく待對面の上を
委細の吏と語るべ。とくへて座。みつま居。下。どう。塵兵湯
立飯。さて外の方も。ひも。於破矢も。小蝶も。安心。金と返す

何更々受取のち一文まとりと飯アリ。とソノツト裏ふへて
彼さうかと考うけつゝふ見うけぬお歴く。いづの侍方もとづれ
さすがに威儀とづく。塵無清とソヘ和主よあやふ。今ダモア
ケレド。賤き業といとむびべき人品と見ゆ。おのれハ尚地月影
今谷判官の家臣箕腹蝶右清門とづく。今日和主とづる
来る別義イア。日若の玉兔之助。金沢モ渙瓶
遊覧の飯。霧ヶ沢の月輪寺ふ立ト。彼寺より居る蝶吉
容貌世ふとぞひなれ。養質あると見ゆ。小扈從ト
ウカヘンと望き。彼寺の上人へちでにうけられて吹嘘有ん
との答。和主ハ蝶吉父もそりて。引取ゆ。今零落
せられ。上人の物語。和主ともり。和主ともり。

の武士が取立。まろんより更々。親子一時の出世あれば。身
違背。また。とらひ。挾箱の裏より衣服両刀と取立。是ハ
則主従契約の事。ふもうと。うとひく。塵無清が面前
よりあたぬ。塵無清はこれと。案ド煩くる。氣色も。志を
くともせざり。すわりて。のうへ。彼上人吹嘘のうへ。兒子グ
昔ハ武士のまもと。者されど。かく零落。兩腰と一條
の息杖。うとうか。案山子の弓矢。手ふうぬ。いや。一
身と。うう。うう。身と。ゆゑありて仕官とのぞま。况弓馬乃
沙汰ふ。及べど。兒子が美貌のやゑに。立身する。本意
きく。孫也。うう。バ。くも存せ。貴人の賜。受ける。不礼。されど。

此品へ此役返上仕ると案外多く返答す。蝶右衛門へあべ
詞もとよひる。偶々うそりわたり鳴子う目とつけ取上
多く打ちあがき。此鳴子の裏に此娘賣物とうよる。察する
所貪苦うせあり。それより娘と賣一かん娘と賣程の所存
みて蝶吉が美貌うむ立身と好みとくらむをと。まことに
使者う立てるやうれど。うそり返答うと。釘打詔の理う
つまり「イヤ其儀へとくらむ。心とくらむ蝶右衛門下りま
仕度をきく。うそりのまう。其儀もとくに察せ。故これ
此金子ととまう。あり。これゆきも得心きたや。うそり懷より百両
包と取出し。塵兵房が前うかく塵兵房ハ此金子とくらむ
と心の裏うそりおひらげて。又わく。忽武士魂と枉詔とゆく。

ソノ後はさう厚き湯恵とうけおさり。もたらもいたたえられた。
ちやせふときは是等のまみゆの頂戴うそり。とくに蝶
右衛門ハ心うちつまく歎び。まく目見えの儀ハ吉田とくらぶ。
追てり。越一かべーとり多く別と告く。歎き。塵兵房ハ門もう
多く肉み入。何ちかえ口とぞく手とゆく。佛壇の前よひ
まづま。おなじく拜一く。扉とひしきだ。苔蒸うる五輪の石塔を
安置一く。香華と手向む。さく妻娘うじゆくくりく。見
此春旅より飯一と。此五輪と取来。多くもと。祭影。汝等
まし。其咎もせざり。今日ハつらひをかね時節とゆく。父の非とあくまでもうび
やむとく。得ど語るぞ。とも我亡父ハ五大院左衛門宗繁と

まことに。故相模入道より重恩とうけたる人ありしが。入らしの
亡びをまかとす。預あわせむるは嫡子相模太郎邦時ふと
賺一出一く情き。敵か打ちか不道人されど人毎に凡薄と
悪ミ。梶惡の罪オと讒名を一身をあくふ處ア。舊友ありと
りと一飯とある人あく。遂アな路ノ餘死一く終多ヒーと
聞其研我ハ幼稚く何ゆもあらず。此春人の語と云べ
父の終焉の地ハ越中國蛭牙山のうちア。其跡を尋めよと
此春旅立一く彼山ノ到ラシド。此五輪の塔ノ上がゆく。
五大院宗繁靈廟ア。あるて疑ひもあれ。七父のちアカリと
もり。彼山中の者アつまくは一ふ。此塔の情ア山人等が集
ま。建置ア。我よりア此塔をちく彼山中ア。若故相模

太郎じゆ所縁の人の目アから。塚と発見もあれ候。
此塔とどう去く跡とくをアチドトモ。荷物のやうアつう
ア。遠路といふぞとびえ。おろべき寺院も建ちやと
あれども。これも人目アからんと云いとひく。かく我家の仏壇ア
そゑあとく。其靈と祭ア。我他人の情ア成長ハ内まとも。漸く
み零落ア。かく賤ア業ア。貧窮するも皆是親の因果
の子ア報道理ア。我身とアむるハ父の眾科と滅ぼさ便
きとおりを少一もいと。况仕官をどぞる心へ病をうも
わざれども。小蝶も蝶吉も養ふれ。二人の者ア。我身乃
因果と申す。貪きアーベキもとあ歎ハ。一つ
ナアリ。小蝶ア。身とアムシナアリ。ツヤ蝶吉が身と立ち居

おりべ。日来心ひごろこころ。誓言ちくわんひよる。僕ぼくとすす。仕官しがんとまことに。かりとく。小蝶こわだよむからて。はるはるは。是此笛このの笛。濡髮ぬれがみと名づける。名管なげんなり。又古革ききわ筆ふの肉にく。錦にしきの手把てあさ。てみよる。横笛よこ笛と取とりゆ。小蝶こわだよむからて。はるはるは。是此笛このの笛。濡髮ぬれがみと名づける。名管なげんなり。これへ汝おまが實父じつふ伊勢圓いせのくにの樂人がくじん。二見太夫ふたみたうふ。是次とつひー人の秘ひ密ひそひあり。一物ひとものうちが於破矢おちや。我われをあけむたぬ。我われまを貪うぶせまりても。賣代うりしろきうぬへ。亡人うしなむにんの是次これどく。義ぎと立たつる。今やいまよもて汝おま。是とあらす。間あいだの親の遺物おとものとも。肌はだもあらと持もつく居ゐよ。もろひて涙なみだ。一いつれぞ。小蝶こわだへられと。かゝれ。戴つけて。これどうもの親人の遺物おとものとも。もろひて涙なみだ。懷いだふかきめう。方破矢かほやの夫の物語ものがたりと。まよ。もとよりて其素姓おとものふけいと。あら。父の罪つみと。隠かく。孝心こうしんと。りれ。義理ぎりある。養子やうしのといつく。ひ意無深うひふかき志しを感うなづく。

小蝶こわだと。さりふひ。涙なみだ。涙なみだ。むせがう。かくて又時刻とき。落日らくじゆ。煙えんと。あがて碧霧みどりのきりと。生う。粉雲水こひるいすいと。映うつく紅べにの光ひと。散ちる。釣竿つりざな翁おきなの舟ふねと。移うつく家路いえじゆと。急いそ。むとむる鷺さきへ友ともと。集あつて。渺汀渺てい。小
さう。芦花すくはの雪ゆきと。やう。濱風はまかぜ。苔深こけこよき。軒端のきはたと。めぐ。赤蜻蛉あかせうりの紅葉べにと。ちう。枯枝かれをきと。枯枝かれをきと。声こゑ。山鳩さんじゆも。宿すくと。くうで。も。黃昏こうふんの頃ころと。あれを。於破矢おちや。涙なみだの目めと。のぞ。灯臺とうだいと。取出だして火ひと。とり。門もんの戸とと。さう。さんと。あら。所ところ。彼手越かてこしの里さと。妓家ぎけい。駕籠こしらと。つ。せくつと。來き。約束あくせくの時刻とき。や々よむく。來きつ。も。來きつ。と。娘むすめの更よ。つまく。もう。かた無心むじん。か。別の更よ。と。入いく。よ。や。そ。娘むすめの更よ。つまく。もう。かた無心むじん。か。別の更よ。と。前程證文まきよし。手形てがたと。押おそく。かく。まぐり。

度少へあれど。此方こそそぞに金と得するにす。前程受取する所の代七十両と云ふと金を。何とぞ約と変ト證文とし。此後とくとくいとみまよと。夫婦口といふとくつらふ。妓家へ色をうえ。汝者等へ妓家のそぞりは知れども。一旦金と済一と證文としけれど。りそや此方の奉公人等。其方の娘かあらぞ。いそゞ元金と返をぐく。乃理うるんやとくふ。夫婦はうどおりひき。いふもとくうけひきと。頭と機りふ手とく。まことに詞とそーなる。か不聞入ざれば。おうべ元金と三十両。百両とそく返をぐれをまへくとがひとと。妓家へ耳子とも入をもと立く。やくかに詞と費をもとめひて。夫婦をほきのけ。灯臺のうは泣伏る娘の手とく引立。加鶯籠の裏ハシマ

おー入く。垂と撲とおろし。そくやれと鶯籠といふと走り去ぬ夫婦ハ跡と見おかず。尻居アトナレとあきる。吃とからざもせど。おおーわんきく居そり。どう一モ海士の子ども多が穢よあそびく吹きむ。漢笛の音さへあれり。やありく塵共宿ハシマ片手辛子鳴子片手ふ。金の包と取上く双方と打ひだ。歎息とてクル。嗚呼禍福吉凶へ糾る纏のドーとゆもぐう。今二時もく此金と得る。此娘賣物と。カクサキき文字へ見ゆり。立身とのぞまぬ我身へ。うそく仕官をせ稀をうね義理となり。憂目と見せとある。娘の人生と渡る。これ此如く百両の金と手と握。子と賣く泣因果か親ヶ世ハシマ又とあるべき。づくちより禍の來。多く今日一日ふもるゆ

かとて鶏の觜不^レと齧^レ。是^レ我身宿業の^レ。是^レ我身宿業の^レ。是^レ我身宿業の^レ。
妻ありし。娘と妓家へ^レ。此金を何^レせんと^レ。金乃
包と投出^レ。ソシハヤ娘と^レ。鳴子と抱き泣^レ。悲歎の涙^レ。むせび^レ。ソシハヤ娘と^レ。聲とおげ^レ。悲歎の涙^レ。來^レ。門首^レ。と^レ。塵^レ。其^レ湯^レ。内^レ。か^レ。ゆく物とぬをぬき
と^レ。呼^レ。を聞^レ。て告^レ。来^レ。我^レ。三^レ人^レ。ゆく。夜^レ。弱^レ。の^レ。七^レ里^レ。が^レ。濱^レ。ど^レ。わ^レ。や^レ。奴^レ。出^レ。わ^レ。ゆ^レ。打倒^レ。と^レ。お^レ。ひ^レ。い^レ。
手^レ。づ^レ。彼^レ。奴^レ。取^レ。ゆ^レ。此^レ。家^レ。一^レも^レ。お^レ。彼^レ。奴^レ。一^レも^レ。彼^レ。奴^レ。ハ^レ。ふ^レ。穂^レ。波^レ。村^レ。野^レ。が^レ。せ^レ。り^レ。の^レ。乞^レ。食^レ。
ま^レ。か^レ。と^レ。海^レ。と^レ。高^レ。を^レ。囁^レ。て^レ。囁^レ。り^レ。る。塵^レ。其^レ湯^レ

と^レ。聞^レ。さ^レ。昨^レ。日^レ。の^レ。野^レ。が^レ。せ^レ。り^レ。あ^レ。き^レ。奴^レ。と^レ。彼^レ。奴^レ。業^レ。と^レ
あ^レ。る^レ。も^レ。や^レ。捕^レ。へ^レ。糺^レ。明^レ。と^レ。お^レ。り^レ。走^レ。と^レ。立^レ。
そ^レ。く^レ。こ^レ。で^レ。ゆ^レ。と^レ。な^レ。す^レ。ち^レ。が^レ。か^レ。ど^レ。ち^レ。と^レ。穂^レ。波^レ。村^レ。居^レ。も^レ。
や^レ。つ^レ。づ^レ。く^レ。と^レ。あ^レ。波^レ。何^レ。と^レ。目^レ。あ^レ。て^レ。ふ^レ。う^レ。ぐ^レ。ぬ^レ。べ^レ。ま^レ。思^レ。案^レ。あ^レ。く^レ。
立^レ。戻^レ。も^レ。様^レ。鼻^レ。一^レ。尻^レ。う^レ。り^レ。溜^レ。息^レ。つ^レ。ま^レ。く^レ。居^レ。し^レ。れ^レ。女^レ。房^レ。
愁^レ。と^レ。松^レ。ふ^レ。玉^レ。帚^レ。と^レ。機^レ。轉^レ。ま^レ。と^レ。つ^レ。で^レ。ざ^レ。茶^レ。椀^レ。の^レ。酒^レ。も^レ。冷^レ。冰^レ。
離^レ。ヒ。原^レ。上^レ。の^レ。草^レ。壘^レ。ヒ。白^レ。骨^レ。叢^レ。と^レ。纏^レ。て^レ。影^レ。ま^レ。ま^レ。く^レ。月^レ。の^レ。
山^レ。も^レ。あ^レ。木^レ。の^レ。葉^レ。ち^レ。蛇^レ。ケ^レ。谷^レ。の^レ。墓^レ。原^レ。と^レ。雪^レ。と^レ。あ^レ。む^レ。白^レ。髪^レ。乃^レ。
老^レ。女^レ。と^レ。と^レ。見^レ。ま^レ。一^レ。懷^レ。より^レ。呼^レ。子^レ。の^レ。笛^レ。と^レ。取^レ。り^レ。て^レ。吹^レ。
う^レ。じ^レ。と^レ。ひ^レ。じ^レ。く。竹^レ。蓑^レ。と^レ。お^レ。正^レ。り^レ。て^レ。あ^レ。れ^レ。生^レ。一^レ。別^レ。人^レ。な^レ。ぞ^レ。か^レ。

宮奴の幣又キ。とて不老女声とひそめてゐる。我諸國の靈場
うちの一族の女子ニオとやつて。大指と蛇ノつゝうすと人と欺き
因果縁と異名とぞばれく此邊倉と能細モるへ別儀にあらば。
一ツア管領家の動靜とぞか。二ツシ味方と集めんとあなり
汝ヘイテシモハれを。幣又ハ懷中より一巻と取て。拙者も
余イモセシ宮奴ノオとやつて。あつち味方の連判状。いざ
披見とぞりとぞ。老女ハとうてましくと押ひし。月影とぞけく讀
かり。とせりモ幣又シのどくあれく味方集る。時節と窺
義兵の旗とひるべし。多年の蟄懷とひるべし。あらび入り惜
られ。とぞれ一巻とぞ一巻を幣又ハうけとぞ懐中。山
ヤドモトと聞えもきつ。小動の駕籠の塵を拂とすに
ヤドモトと聞えもきつ。小動の駕籠の塵を拂とすに

者。とて都あふと存るゆゑ。近づく物ふと。つるく擲キモ
ミテシ。彼ハましく不忠者の五大院左清門が子ノシテハ
之を折るのと打取く。義兵の血祭ノシテモ無く召居す。
語るどり一も稻村のうけよ。塵無清ヶ相棒の泥太とどりつぐ。
かくあらんとおひゆゑ。跡とつけく爰ノ来つ。其一巻とぞちへ
ヨリセ。褒美の金アキ。ハムジテモ。幣又ハ懷ノ手とけり。
幣又ハ其手とぞりて袖ぢく。足と並せく彼方へ蹴れた。
老女ハ手をやく竹杖ノ仕籠ノ刀と抜放し。陽炎稻妻
ウクナゲ。泥太が首ハ前ノモ。脣ハ後ノモとぞく。幣又モ
白張の袖とひだりすりて刀の血一ソレ拭ひし。老女ハ刀と鞘
あきゆるや人の柏子背後キ茂竹のうちア。霜夜と寐る

羽はとく雉き。二声こゑ三声みゑ鳴なれ。老女おとめいとく。やよ幣は又此奴このむすめも鳴なて射のられと雉き。ありう紙人ひとりあらとあと。腮ほせりく下げ知しれ。幣は又打うちうかづき。首くびもむくろもうらの。苔こけの清水しみずを投入なげなす。老女おとめへ小裙こまきとりわけく。互たがわりさく耳みみを取うる。右うと左ひだりと見みれ行ゆぬ。

(五) 五月雨さつきや。夜よひそく遊ゆ偵のの曲者くせ。

极き月影つきかげ小谷や判官ばんがん照影ひょうえいへ相摸次郎さがみじらと亡なきーと慙功せんこうにとく。足利あしか家いえより所領しょりょうと増ふよす。威勢いせもおのづく盛さかり。子息玉鬼むすめだまき之助のすけ清影きよひきへ花は谷たにの下館しもだてよりありう。塵ちり兵ひょう衛えも家臣いえしんの列�つゝりて。今いまへ姓名がいめいと備元びげん瀧右衛門たつまつとあつら。心こころもやう仕官しがんされど。一旦君きみりもるくへとぞふうや。

忠志ちゆうしとくとくみけく仕つかへ。とく角つのりうごうて人愛ひとめぐわいおなづりれ。諸傍輩よわいも彼かれ賤せんき業わざとせー時のじののりといひど。おのづく用もちる人ひともく。昔むかの艱難がんなんとくとく。何不足なまらうれとく。唯不運ふぶんきい娘むすめ小蝶こぢよのとく。いふもとて贖あがきす。烟花中ひようちゆう。活地獄ごくじごくの苦くるしきとろひれど。今いまへ都と五条坂ごじょうざかへ賣うくとく。千金せんきんにあらざればばとくとく。今いまへ高たか金きんをかかくとく。とくとく他ほか聞きといとくとく口くち外ほかせど。唯夫婦ふぶ日ひ毎まいは彼かれとく。言ことひて。歎かなくとくすかくとく。かくて入い光陰こういん移換いはん年としへ馳はる。如ごくゆく。あづくともとまことに流水るいすいの海うみとく。とく機き杼おりの歲ときとく。異いきとく。六むつ年ととく。永和えいわ元げん年としとく。動うき助すけへいまと前髪まへがみの若わか乳ちゆをとく。今年こゑへ十七歳じゅうしちみとく。かの箕腹きはら義ぎ右う衛え門もんへ。とく



謀。玉鬼之助の行跡と亂さんとあらへ動之助と
小庵従とさへれども動之助へ忠義の志ありて殿のころを
乱さむ。寵りをもじに恩とさせく隠謀の方人ふもともりゆく
吹嘘せ。淡右衛門も忠勤としひゆ多々漸く立身へ。
今のおれが上う立ちを。今は神とよくあひいふもしく
彼等父子と追退けをやと。時節とまじて居うる。頃日動
の助病アリて。あぐく私宅み下り。打卧居るとさんひひと。
手越の里の白拍子都とふ女と玉鬼之助ふきもあて下やうる
呼ふ。酒宴の奥と見えむ。此都年へ九ふ二ツ三の色ぬれ。ひひ
まれる。養女みく。大娘乃芙蓉の水と出る。如く未央の桺の霞と
おびくる。黒きうじ。曲糸糸竹のあべへ殊ふきもく。類鳥乃

声とやり。綾羅の袖とひるぐれて舞ふ。古の祇王祖女仏
なども専らひきぞく見え。玉鬼之助其艶色を迷ひ
動之助アリ。連日館よりむかひて手越アリ。妾の如
より。眞心とよふ。鶯鶯の契浅ひ。蟻右衛門心中
あすま。とよろこび。おび相手とあつてうつむねとのを
すられべ。まことに。媚酒アリ。耽佚遊宴樂アリ。あくに
養酒珍味席上アリ。郢曲謳歌日夜よ絶え。怜妓家娼門乃
所行。似そ。さてうるわしき。ソシ放佚の行跡と見え。で
譜代古老の臣等。うるぐ和漢の先端とひた。屎諫舌とひゑ
ぐそとくども。つく用ひ。日とひて惡行つのうれべ。り

此更管領のあん耳うつをあん咎ゆるは必定うると。安きころもせど。薄氷と踏みりして胸とてあがくあらう。あるうに動之助長病平愈して出勤し。館のありまえ殿の行跡前うるると見て大おおどき見るにあのがぞく。詞と尽一理と紀し。まめく諫まことうるが老臣等の詞をうなづくまへば。詞と尽一理と紀し。諫とうけれとまよべ。耳にぞれ聞入とまうど。無益の舌と動く我遊興と妨る條奇怪きよ。とくく退けと呵とまうど。動之助、小膝ともう。なへ強く諫けふぞ。やぞ氣色うら。板の汝都が為ゆかりぬうとすと被ふ。諫言うそをて彼とあうぞえととくれり。ふくき奴がまこと敦園せとすまひく。動之助が誠忠の諫とありまうど。殊更此とれ大う爛醉しておひこを。

忽怒の外眞とひきあげす。白鞆卷ととり柄うねとうけのへてかどく手打と見えふぞ。都へわくとまくと。まんとあらうと。かくふあり。蟻右衛門。うそぐく押角ごと近つけど。玉鬼之助へとくとく刀と抜けとまし。いとくあやうに折一也。執權職山咲庄司雪森が妻淀瀬次の間うそくと。うそく短慮うりとくめく袖よとぞておーとも。詞とやくほく宥まし。うそくのまんうまい。上館のあん父君うそくと。うそく勘當わんと里へおうぬくとまく。もうあらうとあびがりやどん。一旦それう。都とよしと。うそくと。妻あらうとまくあびがりやどん。一旦それう。都とよしと。うそくと。妻あらうとまくあびがりやどん。一旦それう。都とよしと。うそくと。里へおうぬくとまく。後妻ひそむあん母君みをうそくあげ。わくとあく彼とあん妻と。あくがゆくまくすれうそくと。何更も妻うまとまくされうと。ひとみとやううまし

允。玉兔之助。それと宝。執權職の妻。とるりの詞。されば。あか
ぐらふり。破んともさむれ。あかく其詞。とうけあまし。
あまし。刀の柄。放しまへ。蟻右衛門。ハこれと見て。本意。あ
頬。て。淀瀬。且動之助。と私宅。ふ退り。松都。ふも
もぐの。とつね。一度里。販るべー。とひく。其支度。とせす。セ
る。庭の木陰。も暗くあり。此日も。もとで。暮の鐘。諸行無
常。と告。渡。都。都。の。人。後。ふぞおりへ。おれ。○此下館の後門
通。ア。田畠。ア。前。や。細き。うな。比。一。も。五月。下旬。み。て。
このころ。で。く。五月。雨。も。あ。げ。晴間。の。夏木立。葉守。の。神。乃
あ。か。と。て。お。げ。梢。と。の。月。の。ひ。く。も。薄。き。夜。かり。る。時。ふ。も
あ。ぬ。覆。面。頭。巾。に。目。を。う。り。出。一。鉢。函。の。両。刀。ど。ま。く。て。武士の

浪人。と。お。が。き。者。何。ク。入。待。や。う。と。ふ。て。ば。わ。く。う。に。立。と。も。ま。く。
後。前。か。心。と。そ。う。て。居。と。折。一。も。館。の。壇。う。氷。の。じ。ん。か。の。鎧。
ゆ。う。き。出。不。破。の。関。屋。の。板。庇。と。り。稻。妻。う。と。う。き。か。の。浪。人。
これ。と。見。く。ゆ。う。つ。棟。の。木。陰。ア。ネ。と。ひ。そ。ら。て。や。う。と。い。う。と
う。の。が。居。る。と。も。う。だ。と。壇。の。な。う。び。取。切。や。づ。嵐。の。穴。と。歩。く。
装。束。ア。打。扮。て。ぐ。と。う。頭。巾。よ。面。と。曲。者。ハ。暗。の。鳥。ク。鳥。羽。玉。乃。黒。
足。を。や。に。歩。く。去。時。よ。か。の。浪。人。棟。の。陰。う。ち。う。い。で。曲。者。ま。と。
う。び。玉。乳。を。曲。者。ハ。立。と。ま。い。へ。そ。ぐ。ー。刀。の。小。柄。と。拔。と。ま。く。
エ。イ。と。声。う。け。も。う。ー。と。打。つけ。跡。と。く。ま。逃。去。の。浪。人。を。承。を
避。て。打。か。と。し。わ。う。き。と。ひ。もう。ど。ち。落。と。る。小。柄。と。ひ。ろ。ひ。と。う。

後日の證拠と曉ゆ。りの木陰に身をさくせり。此處にかの
白拍子都へ手越の里へ歸る。衆物をつかひて徒者あり
てそぞれて後門の方へ出走する。以前の浪人棟のうげりと
ゆりといで刀と棒で打ち落す。從者等へひらく双の稻妻よ
肝とけし。魂とう一歩なく衆物とちくあひ。風の木乃葉と
逃げぬ浪人へ引きて。衆物の戸と引きあひ。都とくく
引出一歩を。都へむづき声立んとまづ。手を口へもどりて
ありまど。後抱よ抱かず。刀をさう手にとらねず。胸をす
つまづくれど都へ肩上血を深す。あきやとさげ声がれつて
若一さんとえをやありえん。浪人の左の小指をくわ切れ。浪人を
おびえぞ手を放されど都へいもむくとお聲と立く。脚鎧の

人ぐひづくふもとぞ。救てよ。助てよとさげとも。苦一息も
ゆきあり。とく音あるをりゆく。誰もする人もゆく。鬚まつて
吉嵐の空す音あるをりゆく。誰もする人もゆく。鬚まつて
黒髪の風の柳と打乱き。染惟子の辻ヶ花も泥よまく哀れ
こゑを。声立させと浪人へ都とのけまはり。押伏く。吭ともてくふは
といせと鮮血まろと下じまく。前の流きをもてまく。時
ふもあくみ葉と散り。七轉八倒身とりまく。手足をもくとせ
歯と齶あくと苦痛の体。目もあくらまく。嗚呼。哉
二十三と一期きて。草葉の露と消失ぬ。くて浪人へ頭巾を
ゆきく刀の血とおのざれ。鞘すおまく。此處と立退んとて
折りもむのさみ畦あせ。とてひといそぐへげふ来る人あり。雨衣と
あすかの脛巾草鞋の旅姿管の小笠と提灯の上みかしき

來りアリ。火を吹け。夜風。火と吹け。月の光と。此方。來る。彼浪人と。行ち。都。死骸。つまぐま。うちも。どうき。と。袖。むけ。人殺。の曲者。まと。と。と。バ。浪人。足。立。戻。ゆ。のともい。刀と。抜く。只一打と。切つけ。旅人。の。オ。と。前。ある。流。と。せん。と。か。土俵。と。う。けと。か。る。土俵。の。小口。と。もう。と。斬。土。へ。と。う。と。か。る。あ。ま。の蛙声。と。う。と。鳴。立。る。月。と。つ。る。黒。た。人の。雲。一。面。と。あ。ま。り。五。月。雨。颶。と。降。来。急。暗。夜。と。き。り。時。上。旅人。も。一。腰。と。抜。く。曲者。と。打。と。ん。と。暗。裏。と。抜。足。一。ツ。も。し。刃。頬。額。二。つ。と。斬。つ。る。浪人。へ。涌。上。下。く。と。れ。と。避。入。旅人。か。づ。く。刀。の。鉛。旅人。の。鼻。の。さ。か。り。ひ。く。れ。ば。胸。とい。ア。と。

走。と。ま。る。松。ひ。切。り。切。り。落。り。互。り。オ。と。入。ち。ぐ。て。打。刀。り。と。ア。空。と。き。る。閉。そ。り。き。り。ぐ。れ。て。へ。接。遊。提。迷。藏。宿。龜。の。水。と。游。グ。ト。く。右。う。模。左。か。模。肩。上。り。て。切。つ。と。だ。お。づ。ん。ぐ。く。と。又。の。下。背。後。あ。と。せ。ア。つ。ま。れ。を。い。ち。が。ー。く。お。と。り。り。ぐ。ー。く。阿。吽。の。呼。吸。を。心。あ。て。ア。ウ。と。切。り。切。刀。お。ぎ。く。ど。互。に。打。あ。べ。ア。ト。く。あ。と。切。む。と。ぶ。り。れ。折。一。も。後。門。の。ま。る。山。咲。庄。司。と。妻。淀。瀬。館。と。下。ま。く。お。の。ぐ。宿。所。へ。く。り。な。執。權。職。の。妻。な。ど。手。傘。足。下。モ。リ。の。か。く。お。の。び。如。立。の。桃。灯。と。前。ア。リ。ア。と。來。ア。泥。の。裏。ア。落。ア。と。や。蓄。と。奴。僕。が。見。つ。け。ひ。う。上。ア。や。ア。か。り。お。ぎ。落。ア。ー。と。く。モ。ア。と。セ。と。淀。瀬。へ。こ。ま。を。手。と。もう。と。お。と。と。泥。と。の。ど。が。桃。灯。よ。モ。付。て

鳴るが空の下の下りて一圍の陰火とあり。モノアリ。人間の浪人のあらぬあらぬをも。旅人も浪人のあらぬ
あらぬ。泥水と逃散して。韋駄天がまかくや。淀瀬
都が亡骸と館の塙の切穴と見つけ大驚おどろき。どちらふ
館よ立れり。ありの更よりと告げたり。館のうち
みも侍宿の武士等手燭と持てけまし。軍用金とせよ
騒動と。玉兔之助ハこのの更と聞。都が
非命ト死れとゆく悲しみとま。彼と殺せても軍用金
とゆふしも。察されしり同人あり。其盜人ともい捕へ
ハツ裂みて都が怨の十丈一丈ともいと。一旦かな一のみ
且怒。と遠くへ去るま。追人と出でてもや捕へ

されと月をやとせー一雨。彼浪人いそぐ一走りて。挑灯まつとう
ぶらうより打落うちおとせん。淀瀬よどせが僕あくべに作天さくてん。泥じづともすりて後のよ倒たお。
挑灯まつとうひらぐすて。前の流ながれもまぐらる。水草みくさの中なかへ落おちこし。
雨あめよきやまく水草みくさの裏うら。くき居ゐるわまよの螢火ひ。よ
もうと轟ごうごと。其光あかり。浪人なうじん。旅人りょじん。淀瀬よどせら三人さんじん。
頬ほほとえあわせ多おおが。浪人なうじん百ひゃく袖そでと打ちあわしく。此場このばを逃のがれ。
やんとと旅人りょじんへゆききた。立たつきびぢてとまんと。淀瀬よどせ。
旅人りょじんと曲者きょくしゃとつかひとて捕つかへんと。其ひまん浪人なうじんつと
さりぬけく逃のがれ。雨あめへきやく簾れんと束つかて降ふまぐら。夜よわ
颶よとあわく來き。新樹しんじゆの梢梢と吹ふき。流ながれの水草みくさも動搖どうよう。
怪あいあ都まとが死體しだいの胸むねもまぐら。一羽いつばの時とき鳥とりを出だす。二声にせい三聲さんせい

ちむべー。都^{ミミ}が口^{アヒ}に小指^{コウジ}とくらまうと食^エと居^ル。——たれと
小指^{コウジ}のうて奴^{ヤク}を其^シ賊^{スル}。されと諷^{スル}捕^{ハシム}べーと。さびーく
令ト^{ヨリ}とまふか。健^{タフ}うる侍^{ミツバチ}と四方^{シガラキ}を追^{スル}。——お^カ
つらふ其^シ行^{ハシマ}方^{カタ}と。りうち得^{スル}一^モも。

雙蝶記卷之二終

